

Wipperman, F. and Gross, 1981: On the construction of orographically influenced wind roses for given distributions of the large-scale wind. Beitr. Phys. Atmosph., 492-501.

——, 1984: Air flow over and in broad valley: Channeling and counter-current. Beitr. Phys.

Atmosph., 92-105.

Gross, G. and F. Wipperman, 1987: Channeling and countercurrent in the Upper Rhine Valley: Numerical simulation. J.C.A.M., 1293-1304.

Kimura, F. and P. Manins, 1988: Blocking in periodic valleys. B-L. Meteor., 44, 137-169.



股野宏志著  
「気象エッセイ  
ひまわり」

書苑新社 1991年3月刊  
226ページ 2,000円(本体 1,942円)

本書の紹介の依頼をうけたとき、一瞬とまどった。というのも、ご存知の方も多と思われるが、著者は古今東西の文献に通暁した博学多才で、ときに芸術にかけても和洋を問わず嗜みの深い方である。したがって、本書の紹介で著者の意を十分伝え得ないところがあるのは、あらかじめご了解願いたい。

著者の紹介は、あとがきの一部をとって、“大阪管区気象台長を最後に定年退職し、その後は防衛大学校非常勤講師として研究科学生に天気予報論を講義し、平成3年3月末で5年間の勤めを終えた”，というくだりを記しておくことにする。

内容は、すでに印刷物になっていたものが多い。著者の勤務官署の定期刊行物に掲載されたいわゆるエッセイが1/3を占めている。ほとんどは、気象のことに結びついた話題からなっている。

始めの1/3は、著者の講演の原稿などを整理したものである。ここでは、話題は比較的气象学全般にわたっており、古典の教養のなかに気象現象をとり込んで、やや哲学的な思考を加えて気象講演をしたものが整理されている。そのなかのタイトルをいくつか書き出してみると、

3. 天網恢恢疎にして漏らさず——天に衛星，地にア  
メダス
9. 色即是空——雲は形あれど実体なし
11. アイオロスの琴——大気の流れが奏でる音楽
12. 風は気ままには吹かない——大気の力学

これらは、それぞれ標題もしくは文中の引用が、老子、般若心経、ギリシャ神話、聖書である。

中ほどの1/3は、かつて本誌の解説欄で、グノーのG線上のアリアにたとえてロスビー波の振舞が説明された「天気予報——その学問的背景と実際の側面」(1977年10月号)と、荒城の月の楽譜付きでもって大気大循環メロディーを説明した「総観気象学への招待」(1986年11月号)である。別に、後半「雄略天皇」という一文があり、なかで、“数値予報の解説書などを書いたりしたが、考えてみると、個人の趣味を取り入れることが多く、読者には申しわけないことであった”というくだりがみられる。この本については、すくなくともエッセイと断ってあるので、読者は著者の趣味に寛大でなければならない。

まだまだ著者の多才な面は枚挙に遑がないが、書評を頼まれて一瞬しり込みをしたことについて、ご理解はいただけたと思う。ともあれ、気象学の追求に疲れを覚えられたときは、このエッセイを読んでみられては如何なものかとお勧めしたい。気象学の分野に身を置いていてよかった、と心にゆとりを感じさせてくれ、また研究の新たな糸口もつかめるのではないかと思われる。

(札幌管区気象台・原田 朗)